

沖縄の痛み 変わらず

表題と写真は、朝日新聞 9 月 4 日「米兵少女暴行事件 きょう 20 年」である。沖縄の痛みを感じるためにも、「当時の副知事・東門さんに聞く」を書き写しておきたい。

20 年前、県副知事だった東門美津子さん（72）＝ 沖縄市＝は県庁へ向かう途中、ラジオを聞いた職員から事件が伝えられた。「またか」。4 カ月前には宜野湾市で 20 代の女性が米兵に殴り殺される事件が起きたばかり。登庁すると、目を赤くした女性職員が手を震わせていた。

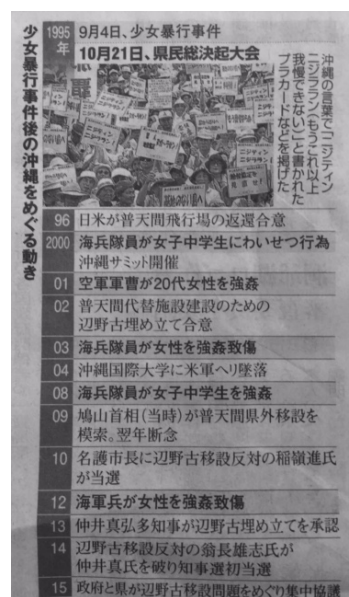
戦後 27 年間、沖縄は米軍の統治下に置かれた。米兵の性犯罪は繰り返され、中学生だった 1955 年には、近くの街の少女が米兵に暴行されて殺された。副知事室の電話は鳴りっぱなしになった。県内の女性団体がまとまり、米軍や日本政府への抗議に動いた。事件の翌 10 月に県民大会が開かれ、主催者発表で 8 万 5 千人が集まった。

「軍の支配で傷ついてきたのは、力の弱い女性や子どもたち。みんな気づいたんです。日本に復帰しても沖縄の状況は何も変わっていないと」。沖縄の声に押され、日米両政府は普天間飛行場の返還に合意。だが東門さんは、その後は県外の共感が薄れていくのを感じた。

2000 年に衆院議員に初当選した後、外務委員会で質問すると「また基地ですか」とヤジが飛んだ。沖縄市長を 06～14 年に務めた時も、米兵の性犯罪が相次いだ。基地司令官や日本政府に抗議したが、返ってくる言葉は「再発防止に努めます」だけ。『『平和』のため、多少の被害は仕方がないんだ、我慢してくれ、そんな態度に見えました』

13 年、普天間飛行場の県外移設を求め、県内の 41 の市町村の首長らが参加して東京・銀座をデモ行進した時には、沿道から「沖縄は甘えるな」という声を浴びた。ぞっとした。犯罪や事故、航空機騒音……。生活者として当たり前の苦しみを、変わらず訴えてきたつもりだった。本土側の目線は、いつの間にか変わってしまったのか。「私たちの思いは、最初から県外には届いていなかったのかもしれない」

返還されるはずだった普天間飛行場の上空は、今も米軍機が飛び交う。政府は、名護市辺野古への移設が「唯一の解決策」と繰り返す。あれから 20 年、米軍施設が沖縄に集中する構図に大きな変化はない。



(2015年9月13日)